

子や、受け身がちな姿勢の子も、みんなで作っている所に集まって自ら活動するなど、好きな活動や生活の文脈に沿った内容で単元を構成していったことが効を奏したと思われる。みんなで頭をつきあわせながら作っているのですぐ指示も出しやすく、子どもとのやりとりが自然な感じでできた。しかし、まだ何を作るのかが子どもたちにはっきり見えてなかったり、完成図だけでは子どもに組み立て方がわかりづらかったり、また時間内に完成させてしまおうと焦って教師のほうで先に釘を打ってしまったりしたことも多かった。数学的な事柄をしっかりと押さえるべきなのに木工作业が中心の授業になってしまった事も反省される。今後何回か行っていくうちに、子どもたちも見通しをもつことができるようになり、教師側も落ち着いて授業を進め、教科として指導すべき点をしっかりと押さえることができるようになってはじめて納得のいく授業になるのかもしれない。

(河 合 利 秋)

## 事 例 2 数学「カレンダー」

### (1) 生徒の実態

このグループは1年生1名、2年生1名、3年生3名で構成されている。言葉の理解と表出については、サラダ、うどんなどの身近な食べ物や鞆、帽子、靴などの身のまわりの物の名称を幾つか獲得している。数量の認識面では数えることが難しい生徒から3まで数えることができる生徒までいる。生活の中にある数字の一つであるカレンダーについては日付(ついたち、ふつかなど)の言い方や日付と曜日の対応が難しい生徒がいることがわかった。情緒、対人面では、自分の思いと違っていた時に大声を出す生徒や、教師に相手をしてもらいたいために故意に鉛筆を床に落としたり、靴下を脱いだりする生徒、喧騒その他の要因に過敏で教室移動が時に難しい生徒などがいる。一人一人の生徒については教師が1対1で相手をすると落ち着いて課題に取り組める。

### (2) 教材観

カレンダーの見方や数字の読み方が難しい生徒がいることを受けてCグループの生徒の数学の内容としてカレンダーを取り上げた。小学部時代からの算数の学習で数字には馴染みが深いと思われるが数字の呼名や理解についてはつまづきのある生徒が多い。カレンダーは毎日の朝の会で日付を確認する場面に登場しておりよく知っているものの一つと思われる。また、子どもたちが楽しみにしている運動会、修学旅行、遠足などの行事は事前学習の中で「いつあるのか」が必ず話題にあがる。その時はカレンダーを通して話をすることが多い。

カレンダーの指導内容として一般には暦の基礎概念(1日が終わると次の1日がある・昨日、今日、明日の違い・今日の日付など)・1週間、1か月、1年の日数・日付と曜日の対応・日付の読み方・日数計算など多岐にわたっている。

生徒の実態を考慮して今回のカレンダーの指導では数字や曜日の文字と音声の対応、日付の読み方(ついたち など)、日付と曜日の対応を主な目標とした。

### (3) わかる状況作り

指導にあたっては目標に迫るための方法と授業の展開においてそれぞれ以下の観点に留意しながら『わかる状況作り』を心がけた。

#### 【目標に迫るための方法】

『音声パターンと文字、数字との対応づけを促す』(図1)

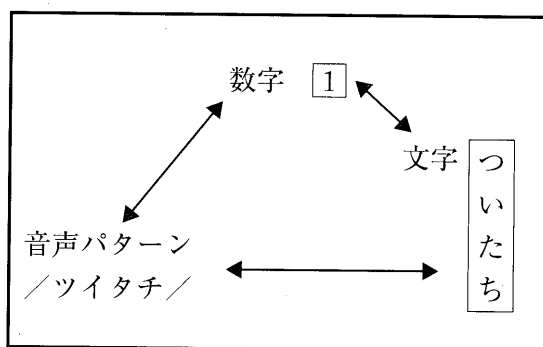


図1. 『音声パターンと文字、数字との対応』

音声パターン／ツイタチ／と「1」の対応や／ゲツヨウビ／と「月」の対応のように、音声パターンを聞かせて漢字や数字カードを選ばせたり、漢字や数字カードを見て音声パターンを産生させたりしていった。平仮名が読める生徒には平仮名カードも提示して対応づけの補助をしていった。

#### 【教具の工夫】

曜日と数字の対応については、ボール紙を縦長に中抜きして特定の曜日の縦の列のみを示す枠を作り曜日と数字の対応が付きやすいようにした。(53ページ参照)

#### 【授業の展開】

『ことばと見本で何をするのかを伝える』

これからする課題についてことばでの説明と同時に見本を示して、生徒に「何を求められているのか」をわかりやすく伝えるようにした。

### (4) 指導の実際

学習の前半は黒板に貼ったカレンダー枠に1～31までの数字カードを貼りながら全員で一つのカレンダーを完成する活動を行った。数字カードは1～5、6～10のように一人5枚ずつ貼ることにした。その中で数字—数詞の対応や日付の言い方、曜日と数字の対応について学習した。後半は各自が数字を書いたり、数字のシールを貼ったりして自分のカレンダーを作り上げる活動を行った。

ここではO男とM子の事例を挙げる。

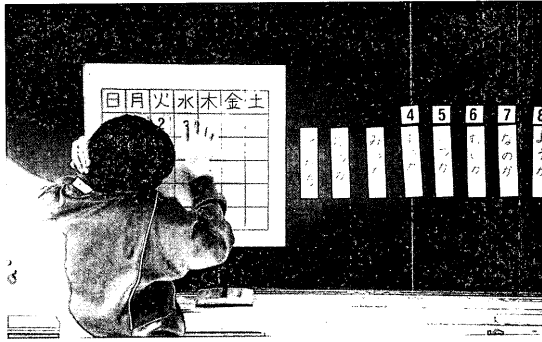
O男は小学部の5年と6年の時に毎日の朝の会でカレンダーの日付と曜日を発表する係をしていた。2年間で0～9までの一桁の数字が読めるようになった。10台20台の数字は「15」は「いちご」、「23」は「にさん」と読むことがみられた。また、1や2を「つたち」「ふつか」のように読むことはできなかった。曜日は漢字の『月、火、水、木、金土、日』を見て各曜日が言える。課題の意味がわからないと席を立ったり、自分の好きなロゴマーク書きに熱中することが見られる。

O男の個人目標を

- ・11～30までの数字を言うことができる
- ・1～10までを日付の読み方で言うことができる
- ・日付と曜日の対応ができる

とした。

O男は11～30までの数字の呼称が目標の1つなので11～30の数字カードを貼る活動をし



『日付の言い方の学習の様子』

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

図2. 『曜日と数字の対応』

た。1度に5枚ずつ連続した数字カードを貼ることにした。これからする課題についてはことばと見本で丁寧に示すように配慮した。数字カードは黒板にランダムに貼っておき、教師が「次は じゅうに だね」と順番と読み方を提示することを心がけた。数字カードを貼る際に本人に復唱を促すようにした。

曜日と数字の対応については、ボール紙を縦長に中抜きして特定の曜日の縦の列のみを示す枠を作り曜日と数字の対応がつきやすいようにした。(図2)

課題の意味については理解できた様子で毎回教師の促しで取り組んでいた。

数字の呼称については任意に指定した数字を呼称できるようになった。しかし、11から続けると20台の数字も「じゅう・・・」とつられることがみられる。また、20台の数字を読んだ後に10台の数字を読む時に「にじゅう・・・」とつられることがみられる。

1～10までの言い方については、その時間内に自発することができても1週間後のこの時間や、朝の会の時には自発できなくて教師が「つ(いたち)」「ふ(つか)」などの語頭音を提示すると言える状態である。曜日と数字の対応は枠内の縦の列を見ればよいことがわかり、枠がなくても曜日と数字の対応ができるようになった。

M子は数字の理解と呼称は1～5までできる。曜日の理解は難しいようである。本人の気持ちが十分和むと大人の復唱の促しに答えたり、大人の問いかけに指さしで答えたり、自ら発話したりする。普段は授業の場面では自発話や応答の発話がなかなかでてこないため、本人の実力を測りかねるところがある。情緒・対人面では特定の生徒によくちょっかいを出す姿が見られる。教師の注意を引きたいためか、机上の鉛筆や教具を下に落とすことがある。M子とかかわる際には「さあ、次は上手なM子さんですよ。」などと声かけをして気分を乗せる演出を心がけた。

M子の個人目標を

- ・ 6～10までの数字の理解と呼称をすることができる
  - ・ 数字が書いてあるシールを一人で貼ってカレンダーを作ることができる
- とした。

数字の読みについては教師が数字カードを示しながら「これは6です。」などと数字と数詞の対応をその都度行うようにしてカレンダーに貼るという見本を示した後、本人に数字カードをカレンダー枠に貼るように促した。はじめの頃は黒板にランダムに貼ってある

数字カードを教師の「6はどれかな？」などの発問を聞き終わる前に近くにある数字カードから順に取り、自分のペースで全部貼っていた。教師はその都度「これは6、これは7・・・」と数字カードを提示しながら数字と数詞の対応を促すようにすると共に発問を聞いてから数字カードを取るという手順について見本を示して説明した。このような指導の積み重ね

日	月	火	水
1	2	3	4
①	②	③	④

① ②・・・は数字シール  
以降省略

図3.『見本の数字を見てシールを貼る』

で教師の「6はどれかな？」の発問を聞いて数字カードを眺めて6を取ることができた。続いて7～10の数字カードも取ることができた。呼称はまだできない。

書字については1～7までは手本の数字を意識したなぞりであるが、8以降は手本の数字を大きく逸脱した乱雑ななぞりになってしまうことがみられた。そこで、カレンダーを作り上げることが意識した取り組みとして数字のシールを貼ることにした。数字のシール貼りについては、M子がシール貼りが好きなこともあり、何を求められているのかがわかっている様子で次々と貼っていった。しかし、教師が他の生徒を指導しているとシール貼りを中断したり、シールを床に落としたりする様子がみられた。そこでM子がシールを貼っているところへ行って「M子さん、うまいね。」と褒めることばかけをするようにした。その結果、M子は意欲的に数字シールを一人で貼ることができた。

#### (5) 考察

この実践では「わかる状況作り」として『音声パターンと文字、数字の対応づけ』『教具の工夫』『ことばと見本で何をするのかを伝える』の3点を心がけた。

##### ①『音声パターンと文字、数字の対応づけ』

この対応づけは、文字や数字の読みの指導に一般的に用いられている方法である。このグループの生徒にとってはこの対応づけの操作は理解できたので数字—数詞の対応がわかったと思われる。

##### ②『教具の工夫』

ここでは曜日と数字の対応がつきやすいような教具を準備した。ひと月ごとのカレンダーでは縦の列の一番上に曜日が書いてある。ある数字の曜日を確認するには、その数字の縦の列の一番上を見ればよいということをことばでの説明と共に縦の列が見やすくなるような枠を作って示すことで伝えた。そうすることで生徒は理解できた。

##### ③『ことばと見本で何をするのかを伝える』

このグループの生徒は、ことばだけで伝えても何をするのかを理解することが難しい。どんなことをするのかを実際に示範することが必要である。数字カードをカレンダー枠に貼る活動では実際に貼ってみせることで生徒は今からする活動が理解できた。

〔子供と共に生活づくりをする視点から－もう一步踏み込んだ実践の検討〕

今回、導入として、遠足、運動会、修学旅行などの行事から日付や曜日を話題にして学習を展開した。その中で日付や曜日の読み方、カレンダーの見方を中心に学習を行った。今回の実践はカレンダーを普段の生活に活かすことを意識しているが、「子供と共に生活づくりをする」という視点から迫る時に以下のような展開も一例になると思われる。

本校中学部では毎週金曜日の学部集会で、次週の予定についてみんなで確認する『来週の予定』コーナーがある。そこでは次週の行事予定表を教師が話しながら書き込んだり行事を書いた文字カードや絵を生徒に貼ってもらったりしている。Cグループの学習でこの予定表を中心に据えて生徒の生活に根ざしながら日付や曜日を指導していく学習も考えられる。具体的にはCグループで学部集会で使用する予定表作りを請け負って枠作りの線引きから始まり、日付や曜日の記入、行事を書いた文字カードや絵カードの作成をする活動を通して日付や曜日の読み方、カレンダーの見方の学習を行っていくことも考えられる。

(新保利久)

### 事例 3 国語「自己紹介」

#### (1) 生徒の実態

このグループは、1年生2名、2年生2名、3年生1名の5名で構成されている。全員が簡単な漢字を含む文章を読むことができるが、その読み方は一文字ずつの拾い読みだったり、文字をしっかりと見ないで読んでしまったり、正確に読めなかったりする。日記など簡単な漢字を含む文章を書くことができる生徒もいるが、見本の漢字を正確に書き写せない生徒もいる。学習に対しては意欲的に参加し発言も多いが、自分の思いや感想をうまく言葉で表現したり書いたりすることが難しいため、教師や友達とうまくかわれなかったり伝え合うことができなくて授業に参加できないこともある。また、自分の住所や生年月日が言えなかったり、家族の名前が言えなかったり、当然わかっていると思っていたことが意外に話せなかったり、書けなかったりする生徒も多いことがわかった。

#### (2) 教材観

学校生活や日常生活の中で自己紹介をする機会が多い。いろいろな人とのかかわりの中で自分のことを伝える力は大切であると同時に相手のことを知ろうとする力も必要であると考え。そこで自分のことや自分の思いを言葉にしてきちんと相手に伝えたり書いたりできるようになることと相手のことを聞く力を育てることを目標として「自己紹介」をとりあげた。学校生活の文脈の中で機会をとらえて「自己紹介」の場を設定し、「話したい」「伝えたい」思いを育て意欲を引き出していきたいと考えた。その中で正確に自分のことを知らせるために正しく表記したり漢字で書くことが必要なことに自分で気づいて学習できるように配慮することとした。